

企画コンセプト「オノマトペキャラ図鑑」

青井隼人（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／国立国語研究所）

はじめに

「クラムボンはわらったよ。」「クラムボンのかぶかぶわらったよ。」

これは宮沢賢治「やまなし」の冒頭の一節である。小学校の国語の教科書にも掲載されていることもあって、宮沢作品の中でもとくに有名な作品の一つだ。二匹の兄弟蟹と父蟹の親子を描いたこの短い童話は先の印象的な会話で始まる。注目したいのは「かぶかぶ」という表現だ。みなさんはこの「かぶかぶ」からどのように笑っている様子を想像するだろうか。わたしには「可愛らしいけど、少し憎らしくもある」ような笑い方が思い浮かぶのだが、いかがだろうか。

「かぶかぶ」は宮沢賢治が生み出したオノマトペだ。宮沢作品にはこのような独特なオノマトペが多用されていることでよく知られる。彼が創作したオノマトペは宮沢作品の描き出す独自の世界を作り上げる魅力の一つとなっている。不思議なのは、宮沢賢治が創作したオノマトペが何を表現しているかを私たちは知らなかったはずだ、ということである。わたしたちは「かぶかぶ」という言葉に「やまなし」を読むまで目にすることがなかったはずなのだ。それにもかかわらず、作品の中で「かぶかぶ」という表現があれば、わたしたちは何かしらの笑い方のイメージを思い浮かべることができる。

初めて出会う表現であるにもかかわらず、その言葉から何かしらのイメージをわたしたちが掴み出すことができるのは、なぜだろうか。その謎を解く鍵が《音象徴》である。「オノマトペキャラ図鑑」は、宮沢賢治のような創作オノマトペから感じ取ったイメージを、キャラクター造形という方法で可視化する試みだ。「テトテト」「ニキニキ」「スピスピ」のような音形から、みなさんはどのようなイメージを抱いただろうか？ ぜひそれらをキャラクターという形で表現してみしてほしい。そして自分以外の参加者たちが創造したキャラクターたちを見比べて、そのオノマトペから作者がどのようなイメージを感じ取ったのかを想像してみしてほしい。

そもそもことばとは？

ことばとは何か。この問いに一言で答えるのは困難だが、多くの人が素朴に抱くものとして、「コミュニケーションのための道具」という回答が考えられるだろう。釘を打つための道具として「金槌」があるように、誰かとコミュニケーションをはかる道具として「ことば」がある、というわけだ。

では「ことば」はどのような特徴を持った道具なのだろうか。道具は、《形態》と《機能》の2つの側面から特徴づけることができる。「金槌」であれば、金属でできた頭部と柄で形作られており、釘を打ち付ける機能をもった道具だ。「ことば」であれば、その《形態》は、

音声（話ことば）・文字（書きことば）・手形やその動き（手話）などがある。そしてことばの《機能》は、意味を指し示すことにある。たとえば「うさぎ」という単語には「長い耳をしたふわふわとした白い動物」という意味を指し示す《機能》がある。

もちろん「うさぎ」以外の単語もわたしたちは知っている。それではさまざまな単語が秩序だって集められた総体が「ことば」なのかと言うと、そういうわけでもない。「単語の集合体」は《語彙》と呼ばれ、ことばの体系の一部を構成しているに過ぎない。わたしたちは単語をただそのまま差し出してコミュニケーションをしているわけではない。その場面や、相手や、目的などに併せて、単語の形を変えたり、単語を組み合わせたり、いくつかの単語を並べたりして「ことば」を紡ぎ出し、相手に自分の思いや考えを伝える。そして、単語の形の変え方や組み合わせ方、並べ方には、ルールがある。これらのルールは《文法》と呼ばれ、ことばの体系を作り上げるもう1つの重要な要素となっている。

ことばの重要な性質：恣意性

単語には音声や文字、手形といった《形態》と意味を指し示すという《機能》の2つの側面が備わっている。言い換えれば、この2つが組み合わさってはじめて単語が成立する。一般に、それぞれの単語の《形態》と《機能》とのあいだに関係性は認められない。つまり、音列/文字列/手の形・動きが意味を規定することも、逆に意味が具体的な形態を規定することも基本的にはない。たとえば、「長い耳をしたふわふわとした白い動物」を「うさぎ」と呼ばなければならない必然性はまったくない。事実、同じ動物を指し示すのに、英語では *rabbit* /ræbət/、韓国語では /tʰokki/、スワヒリ語（アフリカ）では *sungura* と言い、音形がまったく異なる。



単語は《形態》と《機能》の組み合わせで成り立っている。

また日本語で「くも」と言うと、「空に浮かぶ綿菓子のような白い固まり」と「自らが吐き出す糸で精巧な巣を作る8本足の虫」というまったく違う意味を指し示している。「単語の《形態（音形など）》と《機能（意味）》とのあいだには関係性がない」という性質は恣意性と呼ばれ、人間の言語が持つ重要な性質の一つとして数えられてきた。

恣意性の例外、オノマトペ

言語の性質の一つとして重要視されてきた恣意性だが、すべての単語において音形と意味との結びつきがランダムかと言えば、そういうわけでもない。一部の語彙には音形と意味とのあいだにある種の関係性を認めることができる。それがオノマトペである。

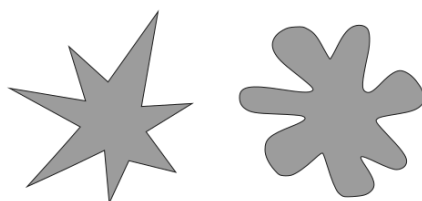
オノマトペとは、「ザーザー（雨が降る音）」「ワンワン（犬の鳴き声）」「バンッ（銃の発砲音）」のような、自然の音や動物の鳴き声などを言語音で真似た単語のことである。外界の音を言語音で再現しているといってもいい。オノマトペは外界の音に似せて作られているため、その音形は意味（つまり外界の音）とまったく無関係では有り得ない。つまり、オノマトペの音形と意味とのあいだには、恣意性ではなく有縁性、もっと具体的に言えば類似

性が認められるのである。

「ザーザー」「ワンワン」「バンッ」などは外界の音を言語音で真似ている。このようなタイプのオノマトペは擬音語と呼ばれる。一方、オノマトペにはもう1つ擬態語と呼ばれるタイプがある¹。こちらは「とことこ」「スタスタ」などの歩行の様態を写し取ったものや、「ざらざら」「ちくちく」のような手触りを写し取ったもの、また「ひりひり」「わくわく」のような痛覚や感情を写し取ったものなどが含まれる。これらの指し示される意味、つまり歩行の様態や手触りや痛覚・感情といったものは、それ自体が音を発しているわけではないという点で、擬音語とは大きく異なる。しかし様態や手触りなどの（聴覚以外で感じ取れる）感覚や湧き起こる感情を言語音で「真似」していると見ることができる点で、擬態語は擬音語と共通した特徴を持つと言える。

イメージを呼び起こす音

オノマトペは、外界の音や感覚・感情に対して言語音を当てている点で、《機能（意味）》が《形態（音形）》を規定している、と見ることができる。指し示される意味に似せるように音形が決められるわけである。それとは反対に、ある言語音の並びや組み合わせが特定のイメージを呼び起こすこともある。心理学で有名な「ブーバ・キキ効果」と呼ばれる実験がある。これは2つの図形のそれぞれに対して名前を付けるとしたら、「ブーバ」「キキ」のどちらを選ぶか、という実験である。その実験で用いられた2つの図形²を下に並べてみよう。みなさんはどちらに「ブーバ」と名付け、どちらに「キキ」と名付けるだろうか。



おそらく多くの人が左の「角張った形」を「キキ」、右の「丸っこい形」を「ブーバ」と名付けたのではないだろうか。このとき私たちは「ブーバという名前に相応しいのはどちらの形だろうか」「キキという名前は、ブーバに比べて、角張った感じに相応しいような気がする」といったようなことを考えている。つまり音形から意味（この場合、指し示す図形）をイメージしようとしている。

「ブーバ・キキ効果」に見られるような「単語（名前）の音形によってイメージが規定される現象」は音象徴と呼ばれる。「音形によってイメージに影響が現れる」ことは、次のよ

¹ 現在日本では擬音語・擬態語の両方を含む用語として「オノマトペ」が通用しているが、原語の定義に従えば、オノマトペ（仏語 onomatopée）とは本来擬音語だけを指す。擬音語と擬態語の両方を含む用語としては、mimetics（模倣語）、ideophones（表意語）、expressives（表出語）などが考案されている（ただし日本語の定訳はない）。

² Monochrome version 1 June 2007 by Bendž Vectorized with Inkscape --Qef (talk) 21:21, 23 June 2008 (UTC) - Drawn by Andrew Dunn, 1 October 2004. Originally uploaded to En Wiki - 07:23, 1 October 2004...en:User:Solipsist...500×255 (5,545 bytes), CC 表示-継承 3.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=19653163> による。

うなオノマトペのペアを比べることで実感することができる。たとえば「カタカタ」と「ガタガタ」を比べてみよう。前者は椅子の脚など比較的小さなものが小刻みに揺れている様子を思い浮かべるのに対して、後者は揺れるもののサイズや揺れの程度がより大きく感じられるのではないだろうか。また「ツルツル」と「ヌルヌル」ではどうだろうか。両者は、tsurutsuru と nurunuru のように、子音が一部違うだけだが、イメージする様子はまったく違う。つまり前者は摩擦抵抗が小さい滑らかな表面を思い浮かべるのに対して、後者は粘り気のあるもので覆われた表面を思い浮かべる。

むすび：言語学とオノマトペ・音象徴

19 世紀に近代言語学が創設されて以来、恣意性は人間の言語を特徴づける重要な性質の一つとして位置付けられてきた。したがって《形態》と《機能》とのあいだに有縁性（類似性）が認められるオノマトペは、例外的・周縁的な単語のグループとして、言語学の表舞台に立たされることは長らくなかった。オノマトペが幼児語（子どもに話しかけるときに使われる特殊な単語）に比較的多いことから「幼稚」「未発達」などのイメージがつきまといがちだったこと、そして近代言語学の発展の中心だった西洋の言語にはそもそもオノマトペがあまり観察されないことも、オノマトペが言語学の研究対象としてまともに扱われてこなかったことと無関係ではないだろう。

しかしながら最近ではオノマトペ・音象徴が言語学の様々な分野で注目を集め始めている。たとえば言語の起源についての有力な仮説に、モノや動作を音声で真似したところから始まったというものがある。つまり原始的な言語は今よりもずっと有縁的だったというわけである。この仮説が正しいとすると、問題となるのは、「もともと有縁的・類似的な性質を持った言語がどのようなプロセスとメカニズムで恣意性を獲得していったか」ということになる。その謎を解く手がかりを与える可能性がオノマトペ・音象徴研究には秘められている。そしてオノマトペ・音象徴研究の重要な対象言語の一つが、オノマトペの語彙数・種類数が非常に豊かな日本語なのである。今後、オノマトペ・音象徴に関する新しい知見が日本語の研究から続々と生まれるかもしれない。

推薦図書

川原繁人 (2017) 『「あ」は「い」より大きい!?』 ひつじ書房。

窪園晴夫編 (2017) 『オノマトペの謎：ピカチュウからモフモフまで』 岩波書店。

田守育啓、ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペー形態と意味一』 くろしお出版。